

輪廻の鎮魂曲『堕ちた  
守護者に贈る詩』

reid

## 注意事項

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## あらすじ

何も見えない。

何も聞こえない。

何も考える事ができない。

何も感じる事ができない。

だが一つだけ理解できた事がある。

「ああ・・・また助けられなかった。」

# 目次

第1章  
『序曲』

輪廻

慘劇

崩落

1

5

10



## 第1章 『序曲』

## 輪廻

「もう……何回目だ？」

眠るように今居た世界と別れを告げる青年。そしてさつきまで居た世界がまるで夢だったかのようにまた青年は木の下で目を覚ます。

「まったくとく……今度は何処からだ？」

少しめんどくさそうに青年は起き上がる。まだ暗い夜中である。

「まだ夜かよ……めんどくせー……」

とても嫌そうな顔で夜空を見上げる青年。一本縛りの銀の髪、黄金の瞳、左頬の傷に、不恰な右腕の甲冑。青年の特徴を挙げるとしたら、これぐらいだろう。

「……文句言っても始まんねーし、とりあえずこっから動くか」

そう言い一人で納得した様子で青年は荷物を手に持ち森の中を歩き始める。

歩き始めたのはいいが、青年は困っていた。歩くのではなく、全力で走らなければいけないのだ。

「やばいな、捕まったら面倒だ」

そうぶつぶつ眩きながら走る青年の後ろには、東洋の侍に似た衣服を着用した男三人であった。三人とも片手には火がついた松明を持っている。

「待て！今度こそ国に連れ戻すからな！ランティス！」

男の一人が元はその国に居たであろう青年を連れ戻すためにその名を呼ぶ。

「うるせー！しつこいんだよおまえらあ！」

ランティスと呼ばれたその青年は出せる限りの大声で叫ぶ。今あの男共に捕まったから、言葉通り国に連れ戻されてしまうのだ。

「俺にはやんなきやいけねえ事があるんだよ！」

そう言いながら青年ランティスは振り向いて足元の倒木を勢いよく蹴る。その流木はきれいに吹き飛び、三人の内二人を巻き込んで森の奥へと消えてゆく。残った一人がそれに気を取られている隙にランティスは脱兎の如くその場を後にする。その瞬間の男の「逃げるなあああ!!」という叫び声はランティスの耳にとてもよく響いた。

「しつこすぎだろ……」

元々大国の騎士だったランティスはある事情で国を抜け出した。国の中では凄腕の騎士の一人だったので国の兵は混乱、国王もこのままじゃまずいと判断して彼の搜索することにした。

そして森で偶然国の兵に見つかり今に至る。

「今回は前途多難だな・・・」

ランティスはため息を吐く。目的を果たすためとはいえ今回はあまりにも障害があまりすぎなんじゃないかと考え頭を抱える。

「ま、今回が初めてな訳じゃねえけどよ」

もう慣れた、と言わんばかりにランティスは苦笑いをする。

普通に考えたら一般人とは色々違う特徴を持つランティスだが、それを遥かに超える特徴を持つ。それは人生を繰り返していることだ。自分が死ぬ、もしくは目的を果せなかった時、彼の中でその人生は終わり、そして新しい人生が始まる。

と、言っても生まれる所から始まるのではなく、正確には彼が目的を果たす前の時間に飛ばされるといのが正しい言い方だ。それだと人生を繰り返すという表現もおかしく見えるが、時間以外は殆ど前に居た世界と変わってしまう。つまり、彼は人生を繰り返す度にパラレルワールドに飛ばされてしまうのだ。

彼の繰り返し返した人生は現在17回。友の皮を被った外道を斬ったことあれば、一国の姫君に想いをぶつけられたこともあった。だが、その繰り返し返した人生の中で一度も彼は目的を果せていなかった。

「さて・・・行くか」

今度こそはと心中で誰かに誓い、もう一度彼は歩き始める。夜空の月はまるで彼を歓

迎えるかのように美しく輝いていた。



## 慘劇

17回目の人生、ランティスは今度こそ目的を果す為に世界中を巡った。それまでに巡った彼の人生は、全て失敗で終わっていた。

彼の目的はたった一つ、一人の少女を守りたい。ただそれだけだった。

「たとえ守り続けられたとしても、これを知ったら俺はあいつに嫌われるんだろうな」  
独り言を呟くランティス。その彼の影は不気味に蠢いており、それは今のランティスがもう人とは呼べない存在になっていることを意味していた。

彼が最初に人生を繰り返し始めたのは15才の夜だった。12才で剣の才能を開花させ、彼の故郷では最年少で騎士になり、大人の騎士でも当時の彼にとつては敵ではなく、騎士団の中でも騎士団長や將軍ですら勝てない程の強さを持っていた。

彼には想いを寄せていた同い年の少女がいた。二人とも互いに両親がいない孤児で、小さな孤児院で暮らしていた。その孤児院ではランティスは子供とは思えない程の無愛想な少年で一部を除いて彼に近付く者は誰もいなかった。そんな彼に最初に話し掛

けてきたのがその少女である。

騎士としてその少女を守り続けて三年、世界に魔王が降り立った。その魔王は世界を支配する為に、配下の悪魔を引き連れ進撃を始めた。

人間達は何もできずに悪魔共に殺された。辛うじて生き長らえたランティスは唾然とした。何も残っていない。国も、帰る場所も、守るべき者も。

「——ッ!!」

声にならない叫び声が響く。何もできなかった自身の無力への怒り、失望、後悔が入り混じった慟哭。それと供に流れる涙は、涸れるまで流れる続けた。

「酷い惨状ね」

涙も涸れ声も殆ど出なくなったランティスに誰かが話しかける。彼が振り向くと、そこには黒い喪服に似た服を着た黒髪の少女だった。

「誰だよお前……」

その少女に見覚えのないランティスはしやがれた声でそう吐き捨てる。

「名乗る名なんてもってないわ。まあ人にはよく『黒猫』と呼ばれるわね」

黒猫と名乗った少女の頭には、名前の通り猫耳があった。

「で、その黒猫さんが何の用だよ」

ランティスは失意により濁りきった目で黒猫を睨む。

「別に、たまたま生き残った悪運の強い男がいたから気まぐれに話しかけただけよ」  
「それだけなら・・・消えろ、目障りだ」

それだけならもう話すことはないと言わんばかりに目を背けようとしたランティスに、黒猫はまだ話は終わってないと言い彼を止める。

「あなたが望むなら・・・」

「望む？今更何を望めばいいんだよ？」

もう全てを失ったランティスに、望むものなんて何もなかった。黒猫の次の言葉を聞くまでは。

「やり直させてあげるわ。あなたのその人生を」

「・・・なに？」

あまりにも常識からかけ離れたその一言にランティスは自分の耳を疑う。自分の耳が正常なら人生をやり直させてやると、目の前の少女、黒猫は言ったのだ。

「冗談はその耳だけにしとけ」

「失礼ね、好きでこんな耳してる訳じゃないのよ」

黒猫は少し不満そうな顔で言う。

「やり直させるとは言っても、正確にはあなたをこの日より前の時間軸に飛ばす・・・が正しいわね」

「今の俺をこの日より前にの日に飛ばす……って解釈でいいのか？」

「ええそうね。その時間軸では当時のあなたは消えるというのも、付け加えとくわ」

「少なくとも飛ばされた世界で当時の俺と鉢合わせはありえないってことか」

一つずつ確認の為に独り言を呟き続けるランティス。その目は消えた筈の希望で輝いていた。

ランティスはその人生を繰り返すことについて黒猫から色々聞き続けた。そもそも人生をやり直すなんて笑い話にもならない世迷言を、彼は信じた。それに縋ってでも、彼には守りたい人が居た。そのためならば、彼は悪魔に魂を売ることも躊躇わないだろう。

話を聞いた上で繰り返す事を決意したランティス。その目には、今度こそは守り抜こうという、強い意志があった。黒猫はそんな彼に告げる

「もういいかしら？そろそろここにも残党狩りの悪魔が来る」

「ああ悪い、もう少し待ってくれないか？」

そう言いランティスは手に持っていた純白の大剣を地面に突き刺す。

「あら、いいの？あなたの愛剣でしょう？」

「いいんだ、どっちにしろ俺が持つ資格はもうない」

「……そう、ならもう飛ばすわよ？」

「・・・ああ、そうしてくれ」

月を見上げながらゆつくりと歩き続けるランティス。彼の影は相変わらず不気味に蠢いている。

「今度こそは絶対に守ってやる、だから待ってるよ、ロイ」

## 崩落

朝を報せるように小鳥が囀る森の中、しかし日差しはおろか木漏れ日すら届かぬ深淵の奥底で何かが蠢く。それを囲む得物を構えた兵士。

「……」

蠢く何かは起き上がり辺りを見る。それは血まみれの青年だった。銀の髪から覗く金の瞳は兵士を映してはいたが認識はしていなかった。

「……?」

状況を理解してないのかそれは首を傾げていた。

「殺人鬼が……」

兵士の一人が口を開く。目の前の青年を殺人鬼と呼ぶその兵士の手には剣が握られていた。

「惚けたフリなんてしても無駄だ、何人の罪なき人が殺されたと思っていやがる!」

怒号を上げる兵士、だがそんな兵士を無視して青年は足元にある青年の物と思われる剣を拾っていた。その剣には血糊がこびり付いている。

「……さあ?百から先は数えていないな……」

不気味な笑みを浮かべた青年はそう答える。その笑みはまるで楽しかった出来事を話す少年のようでもあつた。

「き……貴様ア!!」

それを聞いて怒りを抑えられなくなった別の兵士がボウガンを構え矢を撃ち放つ。その矢は青年の右目に突き刺さつた。だが青年は至近距離のボウガンの矢を受けて怯みはしたが痛がる様子はなかつた。

青年は右目に矢が刺さつたまま左目でボウガンを持つ兵士を見る。今度は認識もしている。そしてそのまま剣を逆手で構える。

「いてえじゃねえか……」

そう言う青年の口元は三日月のように歪んでいた。

「嘘だろ……効いてない……?」

言葉とは裏腹に痛がる様子すらない青年を見て困惑している兵士達。そんな中最初に口を開いた兵士が歩み寄る。

「痛みを感じ取れないのか、それともただの? せ我慢か……どっちにしる化け物だな……」

兵士はトドメを刺すために剣を振り下ろす為に上に上げる。

「生かして捕らえろと命令されていたが危険すぎる……この場でころ——」

突然兵士の言葉が途切れる。

「ゴボツ・・・ゴヒュツ・・・」

途切れた言葉の代わりに血の泡を吐き続ける兵士、その兵士の喉は青年の持つ剣で貫かれていた。

「お前・・・五月蠅いぞ?」

苛立った顔で喉に刺した剣を更に奥へと刺し込む青年。さつき見せていた笑みとは真逆に、ひどく冷めた顔だった。

「ゴフツ・・・ゲボツ」

兵士の持っていた剣は地面に落ちる。兵士は、青年の剣の刃を握り、声にならない声で何かを懇願する。

「しつこい、もう死ね」

青年は兵士の声に聞く耳持たずに剣を持つ手に力を入れて振り抜く。

「ゴバツ・・・ゲヒツ——」

次の瞬間、兵士の首から鮮血が飛び散った。喉を刺されそこから横に切り裂かれた首は辛うじてくつついていた。

「——え?」

首を切られ膝から崩れ落ちる兵士、その音でようやく状況を理解できた兵士達が声を漏らす、驚愕の表情は次第に恐怖へと変わっていく。



「ば・・・化け物ツ!!」

一斉にボウガンや槍を構える兵士達、さつき首を切った兵士を含めて6人は居る様だ。しかし構えたはいいが恐怖により思わず半歩下がってしまったっている。

「さて・・・礼は返さなきゃなア!!」

青年は右目に刺さった矢を引き抜き先程自分の右目を矢で貫いた兵士に向かって走る。

「く・・・来るなあああああ!!」

恐怖により闇雲に矢を放つが、その矢は青年には当たらない。急いで矢を込めようとするが、青年はもう目の前に居た。

「あ——」

青年の剣を持っていないほうの手には右目に刺さっていた矢だった。

「返してやるよ」

その矢を兵士の右目に容赦なく突き刺す青年。

「——ああああああアアああああアア!?!」

悲痛な声で叫ぶ兵士、それが耳障りだったのかまたもや苛立った顔でその兵士の顔を右手で掴む。

「黙れ——」

青年が右手に力を入れるとグシャリと嫌な音が響く。さつきまでもがいていた兵士が途端に大人しくなる。

「……ッ!？」

それを投げ捨てて他の兵士に目を向ける。だが、その次の瞬間青年の体が複数の槍で貫かれる。

「やりやがったな……この殺人鬼が!」

兵士達はそのまま剣や槍で数人がかりで滅多刺しにした。それが終わる頃には、自身の血で真っ赤に染まった青年の姿があつた。

兵士達は何度も青年の生死を確認したが、青年はもう息もしていなければ、心臓も動いていなかった。残つた兵士達は不謹慎だとは分かっているものの、思わず安堵の溜息を吐いてしまう。

「よし……遺体を運ぼう」

そして兵士が一人青年を運ぼうと近付いたその時。

「——は？」

その兵士の胸を死んだはずの青年が剣で刺していた。

「ガッ——」

青年は胸に刺さつた剣を抜きそのまま残りの兵士の方に向かって走る。

「・・・死ね」

気づいて振り向こうとする他の兵士3人を横なぎで全員胸から断ち切る。一気に三つの血の噴水が出来上がる。

兵士は全員殺され、青年は森の奥へと姿を消す。その血だまりの中に一枚の手配書が血で濡れていた。その手配書には青年の顔が映っていた。

『指名手配犯 殺人鬼ランティスⅡアルフォード今なお逃亡中』